◆書　評◆

井手英策『富山は日本のスウェーデン：変革する保守大国の謎を解く』集英社新書，2018年8月

稲　澤　　泉（立命館大学）

1. 本書の背景と目的

10年以上に亘り富山県を訪問・調査している著者が富山社会に着目したきっかけは，「保守的な地域」であるとの見立てをしていた富山で多くの女性が通勤する風景に遭遇したことであった．「保守とリベラルという線引きに疑問をもっていた」著者は，「これはおもしろいことになるのではないか」と「直感」し，この後に年に何度も富山を訪問することとなったという．

本書は富山社会を長期に亘り調査分析してきた著者が，「社会民主主義的な政策のあり方と日本の社会，暮らしのなかにある保守的風土との関係を明らか」にし「保守と革新，右と左を，日本社会の実態や現状に即しながら架橋しようとする試み」である．著者は，富山社会に「日本の保守的な土壌」と「社会民主的な社会」の両者を認め，この「双方の両立可能性」「接続可能性」との「大きな問いに挑もう」とした．そして，全国的に「人間の，そして地域の共同性が弱まっている」なかで，保守王国とされる富山県を取り上げ，「日本におけるゆたかな社会の可能性」（傍点は著者本人による）を検討し，「保革，左右にしばられることなく社会システムの変革のあり方を考え」ようとした分析結果が本書である．

2. 本書の構成

序章では，歴史的文脈によって保守と革新や右と左との「線引き」の意味自体が揺れ動いてきたことが理論面の分析によって示され，富山社会での「発見」によって本書の目的を探求することが宣言される．第1章では，富山の社会的経済的な特徴がデータから語られる．一人あたり県民所得，勤労世帯の実収入，自家用車保有台数，道路改良率や道路整備率などによって，富山の経済や生活基盤の充実度が示されると著者は言う．さらに，女性就業率と三世代同居率の高さに着目し，女性が「子育ての心配をあまりせず働くことができる」環境にあるとされる．また，安定した一人当たり県民所得に加えて地域の経済力は力強く，女性の就労先が確保されていると論が進められる．こうした富山社会の状況は，貧困の少なさ，子どもの教育水準の高さにつながるとし，「所得面と教育面での同質性」が「地域社会の同質性」を示し，こうした「相互扶助的な関係が強い」特性が富山の社会経済における「ゆたかさ」であるとされる．第2章では，貧しかった農民社会が，産業構造の高度化と社会資本整備によって変化していく過程が描かれる．三世代同居によって家族が保育所や幼稚園の代替となり，女性の就労の機会は財政負担による公共投資によりもたらされてきたと分析する．第3章においては，「家族という価値に重きをおく」「富山らしさが浮かび上がる」事例が紹介され，第4章では，こうした「伝統的な家族主義」に頼りきれなくなってきている実態とこれに対応し変化しようとしている地域の人々と行政の取り組み事例が示される．終章では，「保守的な性格の社会のうえに，リベラルな人たちが大喜びするような経済的，社会的循環を生みだしていた」との富山社会への評価が示される．富山社会は転換点にあるものの「家族のように助けあう」風土・「家族の原理」を社会資源とし，「人びとが生存・生活していくため

のニーズを満たしていくという大きな流れ」が富山からの学びのひとつであると分析される．そして，自助・共助・公助のベストミックスとの方向性がいっそう注目されるようになるとして，保革左右を超えてこうした気づきを与えてくれる富山社会に対する評価が結論付けられる．

3. 本書の特徴・興味深い点

特徴の第一は，著者自身が「トリッキー」と表現する「保守が生んだ日本型北欧社会」との一見相反する大胆な仮説を置いていることである．著者は，「社会民主主義的な政策と日本社会の保守性との緊張感を意識」している．そのうえで，保守王国富山にすら起こる動きにこそ，日本の「社会システムの変革」につながるなにがしかの萌芽がないか，「日々の営みの延長線上にこそ歴史の変動がある」としてこの逆説的仮説に取り組んだ著者の挑戦・発想は意欲的である．

第二に，保守的とされる富山における柔軟な発想に基づく取組み事例が本書には紹介されている．これらの事例が富山の社会経済全体の代表性をどれだけ有しているかについてはさらなる調査研究が必要と考えられるが，著者は，保守的土壌において進展しつつある変化に「気づきを与えてくれる迫力」が満ちあふれているとする．フィールド研究を基にする論考ならではの著者の思いが本書には感じられる．

4. 本書へのコメント

先ず，第一に，本書におけるキーワードである「家族」の意味・役割がスウェーデンと富山との間で果たして同一なのかとの問いがある．家族の意味・役割はどういった過程を経て行政とそれを受け止める市民に受け入れるられることとなるのか．スウェーデンの社会経済については，日本においても多くの評価がなされてきているが，例えば北岡（2010）は，戦後ヨーロッパ各国の復興需要の受け皿となったスウェーデンが経済成長を支える原動力として女性の就業を促進しその結果として「伝統的な家族」が崩壊し，社会が不安定化したことを示す。そして，こうした歴史的背景の中で，国が父となり，子たる国民の面倒を見るとの「国民の家」政策が実行された詳細な経緯から，家族のメンバーである国民の「自由と平等」，「女性の家庭からの解放」と「男女平等」との国民の「意識改革」が実行されたことを明らかにしている．「スウェーデンの家族のあり方を根本的に変えるほど」の「メッセージ」が発信され，これと同時に，託児所や保育園などのハード面の整備が進められ，こうした結果として，夫婦の「共同作業」への移行が指向され，夫婦は対等な関係となり，「男女平等，人権・個性の尊重」が「国民の家」の「家訓」となったとされる．福祉国家論を専門とするアンデルセン（2001）も，「ジェンダー平等な家族政策」をスウェーデン・モデルの特徴とする．

ひるがえって，富山における夫婦の「共同作業」「男女平等」の状況はどうであろうか．著者が「富山のゆたかさ」の要因のひとつとする三世代同居の実態次第では，スウェーデンとの比較はかなり慎重になされる必要があるように思われるし，著者のスウェーデンの理解と評価がより深く示されれば，著者の主張がさらに明確になるのでないかとの印象を持った．日本における三世代同居とこれに関わる知見としては，例えば，佐々木（2018）は，社会統計学を基礎としたデータ分析の結果から，日本における三世代同居・近居が必ずしも女性の就業に結びつかないことが確認されているとしている．また，木田（1994）は，明治 20 年代以降の教育勅語の発布と明治民法の制定によって「それまで武家の制度であった家父長的な家制度」が「庶民のレベルまで浸透」していったことを指摘し，村田・新牧（2015）は，近年においても日本では家事が女性に大きく偏っていることを明らかにしている．著者によるさらなる調査研究においては，三世代同居の実態などについて切り込んだ分析を期待したい．

著者は，「自由，公正，連帯」をスウェーデンにおける社会民主主義の基本的な価値と位置付けつつ，こうした価値を「日本の共同体の伝統にもとづいた共通理解の延長線上に位置づけ」られないか，と模索する．この試みは良しとしても，問題は「共通理解」がなされているのかどうか，また，その「共通理解」の内容がどういった内容なのかとの部分の検証であろう．筆者も「家族の持つ『原理』をどのように社会に仕組んでいくか」が重要であるとしている．であれば，この部分の論考こそがまたれるところである．

第二に，著者が着目する「富山らしさ」について，いくつかの事例を基に説明が加えられている．著者は，富山「らしさ」は富山の「ゆたかさ」であるとし，その要因として「三世代同居」「地域のつながり」「女性の就労」「強靭な経済基盤」および「子どもの高い学力」を挙げる．そして，富山の社会経済の「ゆたかさ」が「社会的なつながりの強さ」を予想させるとしている．しかしながら，こうした説明で多く用いられる社会の「厚み」「重層的」との意味が明確に把握できなかった．「家を核として形成される人間関係」が存在しこれが「地域社会を支えている」との捉え方が示されているが，この関係性が，著者が指摘する通り「共同体的特性が強い富山社会」において積極的に評価されるべき「厚み」「重層性」と総括できるものかどうか．「三世代同居」と「地域のつながり」が「社会的なつながりの強さ」と評価することができるのか．今後の富山社会の研究において，この「富山らしさ」「富山のゆたかさ」の核心に触れ，「日本社会における『ゆたかさ』の道標」を示すべく分析と研究結果の発信に期待したい．

第三に，「良さと欠点を冷静に見つめること」の重要性を著者が認識していると明記していることは確認されるべきである．女性の就労状況，三世代同居による子育て環境や公共投資による安定した雇用などから，著者は「女性が働くための条件が整っていることはまちがいない」と評価する一方で，家事や冠婚葬祭の担い手は女性であるとも記している．「社会民主主義的志向と相通じている点が多い」と著者が評する富山社会にみられる「ゆたかさ」について，著者は「表面的に見れば」「一見すれば」そうであるとも表現している．そして上記の女性が働く条件に変化が生じ，富山社会は転換点にあると看破している．こうした著者の評価の視点の基礎となっているのは，地域の人々そして行政すらも変化しようとして取り組んでいるその事例そのものの情報である．これらの事例は，良質の研究対象として今後とも蓄積され冷静に分析されていくべきであろう．

5. おわりに

評者は富山出身である．高校を卒業するまで富山で育ち，両親祖父母も含め，親族は百年単位で富山に所縁があるようだ．著者が調査で実感した保守性は正にその通りと思う．他方で，新しい動きがあることも本書で理解した．著者が示す仮説は，保守王国富山にすら起こりつつある動きを捉えた保守・リベラル両者に向けた問いかけである．こうした試みは，日本社会における変化の進行とともに，論者・研究者の一つの参照点となる可能性があろう．

参考文献

イエスタ エスピン－アンデルセン（2001）『福祉資本主義の三つの世界』（岡沢憲美・宮本太郎監訳）MINERVA 福祉ライブラリー.

北岡孝義（2010）『スウェーデンはなぜ強いのか』PHP 新書 .

木田淳子（1994）『家族論の地平を拓く―競争社会・性別分業・「母性」－』あゆみ出版.

佐々木尚之（2018）「三世代同居・近居の因果効果の推定」佐々木尚之・高濱裕子編著『三世代の親子関係－マッチングデータによる実証研究－』風間書房.

村田ひろ子・荒牧央（2015）「家庭生活の満足度は，家事の分担次第 ?: ISSP 国際比較調査「家庭と男女の役割」から」『放送研究と調査』65（12）pp8-20.